

武蔵野日曜聖書講筵 降誕節

童心

——ルカ伝第2章1～35節——

1978年12月24日

小池辰雄

キリスト道 十字架に向かっている降誕 無者らしき生まれ方 小さきキリスト 南無キリスト
ト 懼れなき世界に入れてやるぞ 投げ入れの態勢 童心 万人は救いを要する 廓然無聖
慧可断臂 われ愛せられたり故に我あり 天国の徴 無心の心 無条件に我を受けよ 童心即
無心即無限無量心 祈り

【ルカ2:1～35】

1その頃、天下の人を戸籍に著かすべき詔令カイザル・アウグストより出づ。
2この戸籍登録は、クレニオ、シリヤの総督たりし時に行われし初めのもの
なり。3さて人みな戸籍に著かんとて、各自その故郷に帰る。4ヨセフもダビ
デの家系また血統なれば、5既に孕める許嫁の妻マリヤとともに、戸籍に著
かんとて、ガリラヤの町ナザレを出でてユダヤに上り、ダビデの町ベツレ
ムという所に到りぬ。6此処に居るほどに、マリヤ月満ちて、7初子をうみ之
を布に包みて馬槽に臥せたり。旅舎におる所なかりし故なり。

8この地に野宿して夜、群を守りおる牧者ありしが、9主の使その傍らに
立ち、主の栄光その周囲を照したれば、甚く懼る。10御使かれらに言う『懼
るな、視よ、この民、一般に及ぶべき、大なる歓喜の音信を我なんじらに告ぐ、
11今日ダビデの町にて汝らの為に救主生まれ給えり、これ主キリストなり。
12なんじら布にて包まれ、馬槽に臥しおる嬰兒を見ん、是その徴なり』13忽ち
あまたの天の軍勢、御使に加わり、神を讚美して言う、14『いと高き所に
は栄光、神にあれ、地には平和、主の悦び給う人にあれ』15御使等さりて天
に往きしとき、牧者たがい語る『いぎ、ベツレヘムにいたり、主の示し給
いし起これる事を見ん』16乃ち急ぎ往きて、マリヤとヨセフと、馬槽に臥し
たる嬰兒とに尋ねあう。17既に見て、この子につき御使の語りしことを告げ
たれば、18聞く者はみな牧者の語りしことを怪しみたり。19而してマリヤは
凡て此等のことを心に留めて思い回せり。20牧者は御使の語りしごとく凡て
の事を見聞せしによりて、神を崇め、かつ讚美しつつ帰れり。

21八日みちて幼児に割礼を施すべき日となりたれば、未だ胎内に宿らぬ先



に御使の名づけし如く、その名をイエスと名づけたり。……

²⁵視よ、エルサレムにシメオンという人あり。この人は義かつ敬虔にしてイスラエルの慰められんことを待ち望む。聖霊その上に在す。²⁶また聖霊に主のキリストを見ぬうちは死を見ずと示されたりしが、²⁷此のとき、御霊に感じて宮に入る。両親その子イエスを携え、この子のために律法の慣例に遵いて行わんとて来りたれば、²⁸シメオン、イエスを取りいただき、神を讃めて言う、²⁹『主よ、今こそ御言に循いて僕を安らかに逝かしめ給うなれ。』³⁰わが目は、はや主の救を見たり。³¹是もろもろの民の備え給いし者、³²異邦人を照らす光、御民イスラエルの栄光なり』³³かく幼児に就きて語ることを、其の父母あやしみ居たれば、³⁴シメオン彼らを祝して母マリヤに言う『視よ、この幼児は、イスラエルの多くの人の或は倒れ、或は起たん為に、また言い逆いを受くる徴のために置かる。』³⁵——剣なんじの心をも刺し貫くべし——これは多くの人の心の念の顕れん為なり』

●キリスト道

今日は、クリスマスを始め——1940年からですから——38回目、おそらく一番人が多かつたかもしれません。

今日はキリスト教が始めての方もいらつしやるので、初めに申し上げておきますが、私にはあまり「キリスト教」という言い方はしないで、「キリスト道」と言います。道ですね。キリスト自身が

「我は道なり、生命なり、真理なり」

と言われた。しかも、あれは定冠詞がついているので、

「我こそは本当の道である」

という意味です。ですから、「我は教えなり」とはキリストは言わなかった。キリスト教と言わないで、私はキリスト道と言います——まあ「キリスト教」とも言いますが、一般に言われていますからね——しかし、本当の意味はキリスト道です。

日本人は道の民です。茶道、柔道、剣道、みんな道です。真理を身に体することが道で、頭でただ分かることが道ではない。そういう意味で、本当は道育なんだ。「教育」ではない。今日は道育なんていう言葉を今、初めて使いましたが、今の日本の教育界がいかにかそのことからずれてしまっているか、慨嘆に絶えないところがあります。明治の人たちはもつと骨があった。明治、大正、昭和と、いろんな変遷がありました。昭和がなんでも悪いと言うのではないけれども、日本人は本来の歴史が持っているところの大事なものはもういっぺん見返して、更に歴史に応えて未来をつくっていかねばならないと、こう思うわけです。内村鑑三先生が、



「ヨーロッパの文化を日本は非常にすみやかに入れたけれども、大事なものを一つ忘れた。これは、偉大な宗教、キリスト教を、文化の底にあるところの、根幹であるところのキリスト教を本当の意味で受け入れなかった。日本はこんなことをしている」と今に滅びるぞ」

と、明治36年に予言しています。

キリスト教それ自身が、世界のキリスト教国自身が昔の本当のキリスト道、キリストの道、福音からずれてしまった。20世紀のこの世紀末的な世界は、あと20年しかないですが、非常に危機的な現実です。また、神を否定している国もありますから、恐ろしいことです。とにかく、神仏に対する畏敬の念を失っているのが大方の姿ですから、どうしても、これは本当の目覚めをもたらさなければならぬ。

私も来年は75歳になるので、もう人生の最後の峠にさしかかった気持がしますから、これから大いに福音のために力を注いでいきたいと、こう思っているわけです。そういう意味で、今日のクリスマスは、降誕節は、私にとつても、また皆さんそれぞれにとつても、大事な意味内容を持っていると思いますので、できることなら、祈祷会まで貫いていただきたいと思えます。

●十字架に向かっている降誕

さきほど、ルカ伝のところを読んいただきましたが、なにも私は今日、聖書の解説をしようとは思わない。福音は、聖書の真理は

「分かる、分からない」

の真理ではない。私は

「聖書はドラマである」

と言う。劇である。神さまの劇である。劇というのは実際、言葉と行動とを非常に生き生きと展開していくところの事態ですから。イスラエルの歴史を通し、またその後、人類の歴史を通して、神の歴史が進んでいく。しかしながら、神の歴史がいかに神の歴史ならざる姿を呈しているわけです。けれども、悪の力が非常に支配しているような現代、現世は、この人類の歴史は戦争が絶えません。戦争は悪の最大な現象です。ですので、聖書が黙示録でも預言しているとおり、最後は世界はひっくり返ってしまう。新天新地が来る。決して、地上はそのまま天国にはならない。けれども、本当に天国を、神の国を待つ人たちは、現実がどのようなことであっても、本当に自分たちがここに天国を開いていく、展開していくという在り方をして行くのです。結果はどんなに反対なことになろうとも、決して失望することはない。

そのことを最も明らかにしたのがこのイエス・キリストなんです。キリストの生涯は、地上に天国を現じて行った。けれども、それは裏切られた。キリストの降誕は、キリスト



の十字架に向かって降誕ですから。単にめでたしめでたしなんていうことではない。しかしながら、キリストはもちろん十字架を突破して、新しき霊的生命として自分を現し、また天界に、霊界に昇って、それから聖霊をくだした。聖霊を降だしてからキリスト教の歴史が始まったわけです。降誕と十字架と復活と聖霊降臨は、これは離すことはできない。それが全キリストですから。私が第一巻の『無者キリスト』に書きました通りです。そういった過去と現在と未来を持った、また地獄と煉獄と天国を持った、そういった重厚な構造を持ったキリストという実存です。

●無者らしき生まれ方

ドイツ語では「クリスマス」とは言わない。「ヴァイナハテン」と言います。「捧げる」という気持が「ヴァイエン」という字ですが、身も心も全部神に捧げる。そして、大いに神を讃美する。そういうことで、ドイツのクリスマスは非常に素朴です。

戸籍登録のためにベツレヘムにやって来たわけですが、そこで月満ちてマリヤは子供を産む。しかしながら、宿屋がみんな満員だもんだから、馬小屋の馬槽うまぶねの中でイエスは生まれた。どんだの生まれかたをしたわけです。世のどんだを担うひとが、本当に生れの姿からしてどんだである。もうこの一つの記事をみても、彼が馬おけの中に生まれたとは、何でもないようなことで、これが大変なことです。これは既に微なんです。キリストの降誕自身がどんだの無者らしき生まれ方をなされた。無者とは無なき者ものと書く。自分を何ものもしない者。キリストは自分を何ものもしなかった。そのことを私は焦点にして、『無者キリスト』という本を書いたわけですが、イエスは無者らしき生まれ方をなされた。いかなる貧乏人でもキリストよりはまだましである。イエスはそういう生まれ方をしました。しかしながら、無者が実は無限無量者なんです。

そして、その夜に実に不思議なことがあった。牧場で羊飼たちがもうそろそろ帰ろうなん思ってたんでしょう。御使が、天の使いが現れた。

10 御使かれらに言う『**懼るな、視よ、この民、一般に及ぶべき、大なる歓喜**
の音信おとずれを我なんじらに告ぐ、11 今日ダビデの町にて汝らの為すくいぬしに救主すくいぬしうまれ給
えり、これ主キリストなり。12 なんじら布にて包まれ、馬槽うまぶねに臥ふしおる嬰兒みどりご
を見ん、是その微しるしなり』

と。ここに神さまの徴がはつきりと現れた。

「大歓喜を福音する」

という言い方です。そういう大なる歓喜です。本当の歓喜というものはキリストの他にはもたらす者はいない。自分は十字架にかかる人が、悲しみではない、最も素晴らしい歓喜をもたらす。いかなる哲学が、いかなる芸術が、人ひとりの魂を本当に100%に喜ばせるところの歓喜を与えることができるか。それができない。イエスだけが、キリストだけがそ



れを与えるためにやって来た。では、歓喜の内容というのとは何か。大歓喜のよろこびの内容は「永遠の生命」です。

誰が死を喜ぶ人がいるでしょうか。冬になったり、それから暑いときになると、よく親しい方々が地上を去りますね。お葬式。もう私はお葬式に何回立ち会ったかな。四、五十回立ち合ったでしょうね。死は誰にとっても悲しみです。今年に誰か身内の人が亡くなると年賀状は出さないというしきたりに日本ではなっている。「三年喪に服す」という言葉も孔子の言葉にある。それでは、時が経ったら諦めるんですか。諦めて済むんですか。私も来年の2月で75歳だから、人生の夕暮れだよな。だから、75の峠を過ぎたら、今度は夜道だ。夕陽を送って、これから夜道を徹夜して歩きます。それこそ、永遠の晨を迎えるまで。

イエスが十字架にかかったのは、死んでも死なないところの生命を与えるために、贖罪のためにかかった。イエスはいきなり天界に往くことのできる方でした。霊化してしまうけれども、

「それはちよつと、お前、待て。この人々の罪をどうしてくれるか。これをお前は贖うんだ」

と。十字架の死をもつて贖う。旧約聖書の宗教が羔を屠つて罪の贖いをした。そういう形式をもつた宗教です。

来年は未の年ですが、
「牧羊人の力に生くる羊かな」

と、私の年賀状にそう書いてある。私たちは羊の年を迎える。「羔」とはキリストのことをいう。羔となって罪の贖いをした。我々の過去・現在・未来の罪を全部贖ってしまった。それを贖罪という。この一つの事を受けとつただけで、もう俄然違つてしまふんだけれどもね。

●小さきキリスト

神はいずこにあるか。このナザレのイエス・キリストに神は現れたんですから。その他にどこに神を捜したって、神さまは出てきません。望遠鏡の中にも、顕微鏡の中にも出てこない。

「科学的にそれは証明されない」

なんて、何を言っているか。科学よりか次元の違った絶対次元の世界ですから。今は科学万能で、何でも科学的に証明されないものは嘘だと思っている。冗談言うなど。大詩人ゲーテは非常に科学も好きな人でした。あらゆることを研究した人です。

「我々の分からない世界に対しては畏敬の念を持って」と、ゲーテ自身が言っています。

そういう本当の畏れを今の日本の教育者は大体において持っていない。私は教育界に対



して本当に失望した。全国の私立高等学校校長会議で、二千何百人もいますよ、私ははつきり言いました。

「校長さんたちは山に籠もって、少し瞑想したらいかがですか」
と。そうすると、笑うよ。

「本当にそうだ」
と、後で拍手した人もいる。

とにかく、今の日本の民主主義は身勝手主義です。私はシルバーシートのことをしばしば言うね。電車のシルバーシートに若いのが腰掛けて、年取った人が来ても譲ろうとはしないではないですか。これが民主主義の姿なら、私はそんな民主主義はごめんだよ。どういうことですかね、本当に。読んでいるのを見ると、マンガや週刊誌ばかり。まじめな本が売れなくなった。まじめな出版会社が倒産に瀕している。これが日本の姿です。

あなた方、若い人は本当に真理のために戦ってください。それでなければ、この集會に来る必要はないよ。正直、もう他頼みひとたのではない。我々一人びとりが小さきキリストにならなければダメなんです。このことはマルチン・ルターが既に言っている。さすがに宗教改革者だよ。彼は必ずばりばりともを言っている。

●南無キリスト

そういう永遠の生命、死んでも死なない生命。これはキリストを受けとることです。ここに大きく、「南無キリスト」と書いていただきました。これはI君の集會の女の方が書いた。それも身体のみならず丈夫なひとではない。魂をこめて書いてくださった。「南無」というのは婦命——南無阿弥陀仏、南無妙法蓮華經という、仏教の素晴らしい言葉だから私は使っています——天命に帰することです。婦人、婦人入る。婦依、依り頼む。完全にそれに自分を任せてしまう。今度は祈入——これは私がつくった言葉です——祈り入る。これを「南無」という。「阿弥陀」(アマッター)は無量寿無量光、永遠の生命です。無量の生命、無量の光です。「我は光なり」と、キリストがこれを言われた。

「我は道なり、光なり、生命なり、真理なり」

と。
「真理とは何であろうか？」

なんて、学者のように探究しているのではない。「我は真理なり」と、権威をもって言えるひとは普通のひとではない。

しかも、彼は自らを絶対に誇らない。本当の権威は、自分を何者ともしないひとが天から受けるところの権威ですから。天権ですから。これも今日初めて使う。話しているうちに新しい言葉が出てくる。漢字というのは、漢語というのとは便利だ。だから、皆さんは漢字を尊びなさい。創造的になってくる。私は楽しくてしょうがないんだ、本当に。大歡喜



の音信の中に入ってしまいうから。クリスチャンでくすぶったような顔をしていたらダメだよ。

祈り入ること。無量寿無量光の覚者、即ち、「阿弥陀仏」というのは、全くキリスト自身のことを言っている言葉です。仏教は「悟る」という角度が強いけれども、キリストの方では顕現しているんです。身をもつて現す。顕現者です。身証者、身をもつて証している。

● 懼れなき世界に入れてやるぞ

マリヤというのはどんな血筋だかわからない。とにかく、マリヤという乙女に聖霊が、神の霊がかかってきた。そして、イエスという不思議なひとが生まれた。

天使が現れたから、みんなびつくりした。だから、

「びつくりするな、懼るな。懼れなき世界に入れてやるぞ」

ということ。「懼れるな」と、ただ道徳的に言っているのではない。もうひとつその奥を読まなくては。聖書の言葉はその奥が読めなくてはダメです。

「我は汝らを懼れなき世界に入れてやるぞ」

と。そうしたら、大歡喜の音信の世界に入ってしまう。

次元の違ったものが現れると、恐れるんだ。怖がるんだよ。幽霊なんていうのはちよつと次元がちがうようだね。幽霊が出てくると、みんなおそらく怖がるでしょうね。屏風の陰から出てきたりする。自殺すると出てくるよ。自殺したその時刻に出てくるんだから、あれはおもしろいもんだね。どういうんだか、ちゃんと時刻を知っているんだな。その時に出てくる。12時半とか、丑三つ時うしだとか。それは事実あったんです、この近所で。私の兄貴が或る貸家に

「これはばかに家賃が安い」

なんて言つて、入ったんだ。そうしたら、幽霊が出てきた。それでもうさつ

さと引き上げた(笑)。

「兄さん、惜しいことをしたな。僕はそこにいたかったな。そうしたら、『どうしましたか?』と聞きたかった」

と。「どうしましたか」と聞いて慰めてやるんです。幽霊というのは霊が浮かばれない。だから、成仏させなければいけない。祈つてあげる。ちつとも恐いことはない。こちらにキリストの霊があれば、恐いものはひとつもない。

私は、聖霊がこない前は病院に行くところ——昔の療養所は、ペニシリンのない頃の肺病患者というのはいつ死ぬかというような実に陰惨でした——私は移らないようにマスクしたり、手を洗つたりしたものだ。けれども、聖霊が来てから、そんな必要はなくなつてしまつた。こつちから神の霊が流れていくから。私が手を按げば、治つてしまつたりする。だから、お医者さんが



「どうしたんだ!？」

とびつくりしてしまう。医者に見離された人を幾人も助けましたよ。私が助けたのではない。神さまがなさる。私は癩病人に手を触れて、按手しましたよ。手を按くということは、按手というのは霊を伝えることなんだ。まちがえては困る。祈りの世界で私が按手すると、しびれたり、ぶっ倒れたりする。

そうやって、特別な集会でひっくり返されて——「ひっくり返す」と言っただって、私が倒すのではない。霊がなさる——次元の違った歓喜の世界に入る。私の関係している集会の人は京都でも、大阪でも、信州でもほとんどそうです。そこらのクリスチャンと違う。それを普通の牧師さんはできないんだよ、聖霊を受けてないから。だから、私は

「今のキリスト教界はキリストの直弟子の次元に帰りなさい」

と、正に

「婦人せよ」

と言っているんだ。これから大いにやりますから。もう、人生の最後の段階で。あなた方、私よりも若いひととは大いにやってくださいよ。

もうそうなったら、勉強しても何か仕事をして、力が来てしようがないから。

「不思議だな、今まで覚えられないことが覚えられるようになったなあ」

なんて。ピアノを弾いていようが、ソロバンをはじこうが、何をするのでも力が来る。これは神の栄光の現れなんです。いわゆる念力なんていうことを言っているのではない。贖罪をされたキリストの霊のことを言っているんです。

●投げ入れの態勢

昨日、テレビを見ていたら、78歳の髯のはえた老人、山田無文という人が話していた。彼が易者に

「あなたは孤独なひとだ。大体、神主か坊さんか、そっちの系統だね」

と言われた。親父さんは非常にがっかりした。この世の栄達をはかろうと思ったから。ところが、易者の言う通りのコースになってしまった。そして、修行して、非常に難行し断食もしたものだから、身体が弱って寝ていた。寝ていてハタと感じた。

「ああ、空気! 空気は素晴らしいなあ。私はこの空気で生きているんだな」

と。そうしたら、涙が出てしよがなかつたと言う。空気のありがたさ。我々の自然的生命は空気がなかつたら死んでしまう。

「この机の上のダイヤモンドと、この部屋の中の空気と、お前はどちらを取るか」と言われて、ダイヤモンドを取るやつは死ぬよ。

それからもう寝ていられなくなつた。力を得て起き上がったという。

そういうものなんです。魂の世界はある一つの絶対的なものに触れると、ぐっと違って



くる。「すべし、すべからず」なんていう、そんな世界ではない。いわんや、神の靈気を魂が受けとるようなことになったら。肉体は、空気かもしれない、けれども、魂は、全存在の一番中心は靈気によって生かされている。

我々は靈気を吸うことが本当の祈りの世界です。しからば、いかにしてこの靈気を吸うことができるか。全身を投ずることなんです。「祈る」とは祈り入ること。全存在をもって神、仏の中に自分を投げ入れることです。この投げ入れの態勢を本当に自分で体験してくださいよ。俄然、違ってくるから。何かお願いすることは枝葉のこと。まず、自分自身がキリストの中に入ることです。ヨハネ伝の始めの方に、

「キリストは神の懐にある独子^{ひとりご}」

と書いてある。この「懐にある独子」と同じように、我々もキリストの中に——仏教で言ったら如来の懐の中に——入ってください。

私は仏教の一流の坊さんのものは好きだから読んでいます。彼らの次元はキリストの直弟子たちと同じものを持っている。内容的にはもちろん違うものがありますけれども、次元的には非常に相通する。だからもう、キリストという無限無量なものが、御靈において中^まにやってくる、つまらない分け隔てがなくなってしまう。これを「父の全き^ま」と言います。キリストが

「父の全き^まが如く全かれ」

と言われたその全きは——我々は「全かれ」なんて言われたってできっこないが——全き質のものがやって来るんです。

何と言っても、全存在で祈り入ることをしないことには、いつまでたってもこの福音の世界は開示されてこない。大体、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ——創世記から黙示録まで——特に福音書のこのキリストの前に完全^まに降参^ましてください。

「参りました!」

と。降参するまでは絶対に入れません。

「分かる、分からぬ」

ではないから。このキリストの前に本当に降参したらば、実はキリストの懐の中にいたということになる。

そういうことを本当にはつきり言ってくれる牧師さんがいますか。「聖書の研究」ばかりやっている。正直、今のキリスト教界はこれではダメだ。もちろん、ダメでない方もいらっしやいます。それはみんな聖霊を受けた方々です。その意味において、我々はいよいよ一人びとりが、どんなに小さな弱いように見える乙女であっても、ジャンヌ・ダルクよりも強くなれるよ。強いとは相手を倒すことではない。相手を救い上げること。本当の力は相手を救い上げるもの。だから、どん底の力という。底力というのはそのことです。



● 童心

私は今日は「童心」なんていう題を出した。ワーズワースの詩に「レインボー」(虹)というのがある。

Rainbow (William Wordsworth 1770 ~ 1850)

My heart leaps up when I behold

A rainbow in the sky:

So was it when my life began;

So is it now I am a man;

So be it when I shall grow old,

Or let me die!

The Child is father of the Man;

And I could wish my days to be

Bound each to each by natural piety.

虹 (ウォーズワース)

わが胸は欣び躍る、

大空に虹を見れば。

人生の曙に然りき、

成人の今も然かあり、

老年の暮も然かあれ。

然らずばわれ死なまほし!

幼児は成人の父ぞ。

魂極る生涯の日々を

結びてよ生まれの虔心。

(小池辰雄訳)

「私の心は空に虹を見ると躍る。かつて小さい時そうだった。今もなおそうである。また、自分は年老いてもまたそうでありたい。もしそうでなければ、私は死んだ方がましだ。幼児は大人の父である……」

と。「幼児は大人の父である」という妙な言い方をしている。「幼児」というのは、童心、幼な心ということ。小川は大河よりも清い。大人の心よりも子供の心の方が美しい。偽りが無い。全的です。泣きたい時には泣く。笑いたい時には笑う。

お母さんたちが子供をイエスのみ許に連れて来たときに、弟子たちがこれを退けようとしたら、

「何だ、お前たちは。幼児を私のところに連れてこい」

と。キリストは幼児に按手して、

「神の国はかくの如き者の国である」



と言われた。ということは、大人の心がいかに権謀術数で、いろいろな策略だの、偽りだの、欲だの、いろんなことでもつてからまっている。濁ってしまったている。

「この幼児の心に立ち返らなければ天国には入れない」

と言う。童心は、私にまた言わせれば、無心です。心無き心です——いわゆる「心なき」という意味ではないですよ、「心なき人々」なんていうのはまた別な意味だ——無心の心です。いわゆる私心のないのを無心という。無私心。わたし心がない。エゴイズムからはずれたもの。

●万人は救いを要する

エゴイズムというやつは自分で自分を縛っているんですよ、よきそうだけれども。慾心が、我執が、自分で自分を縛っている。個人も、社会も、ことに国家も、みんな我執的です。だから、平和は来ない。

「平和、平和」

と言っているけれども、ちつとも平和は来ない。一方では恐ろしい兵器を造っている。

「もう危ないから少し核兵器の制限をしよう」

なんて、アメリカとソ連でやっている。ダメだよ、そんなことをしても。まあ、それだけの意味はあるでしょうけれども。けれども、どうなんですか。人工衛星は軍事的に使っている。人工衛星から何をやってているか分からない。あそこから特別な放射能を発射したら、もうおしまいだよ。もう核以上です。それもそろそろ見当がついているそうさ。それをやられたら、知らない間にみんな倒れてしまう。まあ、科学の力がそんなところまで来てしまった。けれども、それがおつかないのではない。そういうことをして、お互いに殺人をしよう、ひっくり返そうと思っっている人間の心がおそろしい。これは悪魔だ。悪魔も驚いているだろうね、人間というやつは俺たち以上だと。サタンも驚いている。サタン以上のサタンになったら大変なことだ。

それだからもう、万人は救いを要するんです。

「まあ、宗教はいいや」

なんて言っているけれども、冗談じゃないよ。万人はこれ救いを要する。仏教でもいいよ、何でも。とにかく、誰もが救いを要するんです。どうにもならないようになってしまっている。けれども、我々の魂はそういった絶対的な次元のものに接すると、

「もう何がどうなつてもいい」

ということに今度はなる。それが本当の救いの世界なんです。

とにかく、相対的ないろんな判断をして、「ワッショイ、ワッショイ」とやっている。コーヘレスが言っているよ、

「空くうの空なるかな、すべて空くうなり」



と。そういつた世界は「空の空なるかな」ということです。

けれども、神仏を本当にうちにもつこと。

「南無と言えば阿弥陀来にけり一つ身をわれとは言わん仏とは言わん」

という句がある。南無と言ったら阿弥陀がやつて来た。この一つ身を私と言おうか、仏と言おうかと。仏我一如の世界です。そういうような事態を既に日本の偉大な坊さんたちは開いてくれた。

皆さん、どうぞ、本当にこの福音を、聖書を食らってください。聖書の文字は文字ではないですから。読んでいるうちに、その世界に自分を投げ入れる。だから、私は

「聖書はドラマだ」

と言う。

「聖書はドラマだから自分を投げ入れなさい。ドラマ中の人物に自分がなりなさい。

サマリヤの女とキリストが語っていたら、自分がサマリヤの女になりなさい。ペ

テロと語っていたら、ペテロになりなさい。何でもいいよ」

と。とにかく、御霊が来ると、そういうところは実に自由なんです。

●廓然無聖

「何ですか、御霊は？」

なんて。これは出すわけにいかないよ。

『へきがんろく碧巖録』に書いてある。りようぶてい梁の武帝が、非常に仏教に熱心な皇帝だったので、だるま達磨に聞いた。

「しょうたい聖諦第一義は何だ」

と問うた。即ち、仏道の「聖なる諦め」というのは一番の悟りのことです。その第一義は

何だと聞いたたら、達磨が、

「かくねんむじょう廓然無聖」

と言った。「廓然」というのは廣大無辺なことです。「無聖」というのは、聖に非ず、聖も無いと。仏道が一番の奥義は「廓然無聖」だと言う。もちろん、武帝は聞いてもわからない。達磨に言わせれば、まだ聖だの俗だのと、相対的に判断しているうちはダメだと言っています。本当の聖なる世界は「無聖」と言って、逆説的に言わなければならない。聖と意識していたらダメなんだということなんです。

よく、「聖徒」という言葉があるね。その言葉の本当の意味においては、聖徒でいいんですよ。けれども、聖徒ぶつて聖ぶつたら、おおまちがい。この聖は賜りたるものですから。我々の全てのものは全部賜りたるものです。私たちのこの自然的生命も親から賜ったものではないですか。ところが、今の若い者に言わせると、

「親が勝手に産んだ」

なんて言っている。そういうような意識だからダメなんです。



聖を超えた本当の聖、無聖の聖と言いたい。達磨は、いわゆる概念意識でやっているうちはダメだと言う。だから、それは広大無辺で掴みようが無いと。

「私の前に立っているお前さんは一体誰だ」

と、今度は武帝が聞いたら、

「不識」

「識らず」と言った。

「俺は知らないよ」

と。私は分からんと。「分からん」と言ったのは、「私が何である」なんて、そんなことではないんだということ。だから、この「不識」というのは、私が言っている「無者」と同じ気持です。

●慧可断臂

『無門関』^{むもんかん}に書いてある。それで、達磨は引き上げてしまつて、面壁を始めた。「面壁九年」と言われているね。そうしたら、あれはちょうど12月16日だ。ある青年が道を尋ねてやって来た。夕方やつて来たら雪が降りだして来た。達磨はちよつとも彼の方を向いてくれないけれども、いつか向いてくれると思つて立ちすくんでいる。

それだけの棄身で道をたずねている青年が今あるですか。試験のことなら、一生懸命になつて青すじ立てているけれども。

「私は道をたずねているんだ。大学に入るのに入らないのと、そんなことではないんだ」

というような青年がいるかというんだ。もう、大学なんかやめてしまつて、

「俺はもうキリスト一点張りで行くぞ」

というような青年が現れてもいいんだよ、本当に。

そうすると、夜が白々と明けてきた。膝が雪に没してきた。そしてまた、達磨さんに、

「私はこうやって道を求めて来ました。何とか答えてください」

と。少し問答したけれども、

「ああ、まだダメだ」

と、また壁に向いてしまった。達磨というのもずいぶん頑固な親父だね。「慧可断臂」という有名な雪舟の絵がある。その慧可という青年は、左の腕を切つて盆に乗せて、

「私はこのように棄身で求めています」

と言った。キリストが

「片足が無くなり、また片目が無くなって、それで天国に入ることとは、両足両眼あつて地獄に入るよりはるかにましだ」

と言われた。さすがに達磨は、



「そうか、それは感心だ。それでは、俺に心を持ってきてくれ」

「心を持ち来たれ」と。さあ、心臓をくり抜くわけにいかん。

「心は得て得べからず」

「心はどうしても持つていくわけには参りません」と。認識することのできないものが一番根源なものなんです。

「われ汝のために安んず」

「それで私は安心した」と達磨が言った。それで慧可を弟子にして、彼は禅宗の第二祖になった。

●われ愛せられたり故に我あり

心の世界、魂の世界、これが問題中の問題です。これを問題にしないで、何のかんのとやっているのが20世紀の文化文明です。それではひっくり返ってしまう。だから、万人は宗教を要する。救いを要するから、私は

「万人はこれ宗教人である」

と申し上げているわけです。

魂の世界は、持つて行くことのできない心の世界です。

「我思うゆえに我あり」

と言えるところのその思う我は、この心の世界です。しかし、ただ「我思うゆえに我あり」では、デカルトのあの言葉ではまだダメですよ。

「われキリストに愛せられたり、故に我あり」

ということですよ。我々は十字架の贖罪をもつてキリストに愛された。誰でもが、万人が無条件に受けとれる世界、これが一番素晴らしいものです。その無条件なものを受けとらないんだ、みんな。

「そんなことがあるか」

だとか、

「それは昔の話だ」

とか言ってるね。どうぞ、そう言っててください、それで済むならばそれで済むならばそれで結構です。何も私は信仰を押し売りしません。だけれども、魂の世界はごまかすきませんから、それでは本当は済まないんです。必ずいつかは行き詰まります。

●天国の徴

私たちはキリストの中に自分を投げ入れる。逆に言うと、キリストという馬槽の中に自分を生れさせるわけだ。そうしたら、本当に大歓喜の音信の徴であることが分かる。地上でキリストが仰ったこと、なされたことは全部、これは天国の徴なんです。



「今にそういう素晴らしい国が来るぞ」

と。「徴」(セイメイオン) というのは御利益ではないですよ。キリスト者というのは、私たち自身がキリストの徴にならなければダメです。そのキリストの徴になったのはあの使徒たちです。ペテロが「我を見よ」と言った。

「私を見てくれ。わがうちに在るものを汝に与う。ナザレのイエス・キリストの名によりて歩め」

と言ったら、生まれつきの跛者あしなえが立つてしまった。大変なことだ。

「ナザレのイエス・キリストの名」

というのが、そのような実をもっている。名が実をもつためには、自分の中に本当に聖霊が来てなければダメです。

「南無妙法蓮華経」と称えれば、滝の口で日蓮を斬ろうとしたやつがぶっ倒れた。日蓮にかかっている如来の霊が倒してしまった。そうですよ、はつきり。

御霊の世界に入ると、もう病気がとっつかなくなる。風邪を引いたら、

「私はまだ聖霊の次元が薄かった、祈りが足りなかった」

と、そう思ってください。化学的な薬よりも、私たちが自然界から、また生れつきいただいているところの奥に力がある。それは神との交通ができればそうなる。

そのことをキリストは、父の懐に居て、いかに父の御意をなさんと、

「汝の御意を成させ給え。この私をどうぞお使いください」

と言って、提身していたのが彼の在り方ですよ。だから、キリストは神の証者ですよ。それを本当に地上で現そうとしてやって来たのが、このキリストの降誕の意味なんです。何しにキリストはやって来られたか。神の言を、生命ある言を与えるためです。

「わが言は霊こしほなり生命いのちなり」

と言った。

「意味じゃない」

と言った。だから、キリストが言葉を発すれば、何か知らんけれども、その魂に力が入ってくる。そのキリストを受けとった使徒たちがみなそのようになった。だから、使徒行伝のペテロもヨハネもパウロも、えらいことになってしまった。鎖につながれているながら、讚美歌を歌っていれば、大地震が起きて——あれは霊震れいしんだよ——鎖が解けてしまったではないですか。獄守ひとやもりが驚いて、囚われていたものが逃げたと思って、自殺しようとした。ペテロは、

「お前たち、うろたえるな。逃げはしない」

と。それで獄守が回心してしまった。(使徒行伝16・24～34)

クリスマスというのはそういった力を、そういった光を、そういった生命を与えるためにキリストが現れた。



「日の下に新しきことなし」(伝道の書1:9)
とあるが、ここに本当に新しいことが起きた。このキリストを本当に受けとらないでどうするんですか。どこへ行くんですか。

●無心の心

マタイ伝18章1節から、

「1そのとき弟子たち、イエスに來りて言う『しからば天国にて大なるは誰か』」

2イエス^{おきな}幼児を呼び、彼らの中に置いて言い給う、3まことに汝らに告ぐ、も

し汝ら^{ひるが}翻えりて幼児の如くならずば、天国に入るを得じ。」

「翻えりて」とは何ですか。回心です。心をめぐらすこと。

「回心転生せよ」

と言う。

「幼児の如くならずば」

というのはこの童心のことです。

偉大な人はみな死にいたるまで童心を持っています。ゲートなんていうのは大変なやつだ。けれども、本当に彼は童心を持つている。ダンテもそうです。いわゆる複雑怪奇ではない。無心の心という。無心の心から無限のものが展開してくる。そして、知情意の働きが不思議な調和をなす。

男性と女性を比べると、おそらく女性の方が童心をもちやすいのではないでしょうかね。男は一番悪いようだ。天国では女性上位というわけだ。監獄を見たってそうなものな。女囚というのは少ないでしょう。大体、悪い奴はみんな男だ。

「4されば誰にても此の幼児のごとく己^{ひく}を卑^{ひく}うする者は、これ天国にて大^{おお}なる者なり。」

「卑^{ひく}うする」とは、どん底に立ちなさいということ。「謙遜」という言葉があるけれども、謙遜なんていう言葉では表すことができない。「平伏^{ひれふ}し」がいい。

封建時代にはよく平伏しているね。人の前に、人間的な権威の前に平伏しているのでは、実にお気の毒な話です。一応の敬礼は結構だけれども。もう片一方はいばりくさっているだろう。あれはよくない。よく時代劇でやっているね。悪い代官なんかやつつけられるから、ああいうのを見ているのは面白い。それで私は時代劇をよく見ますがね。勧善懲悪という。本当に悪いやつがたくさんいたんだな。泣いても泣ききれず、血を流したひとがたくさんある。あんな威張った奴は全部、地獄往きた。

神さまの国では、もうそういつたはつきりとした審判が来てますから。人間の判断以上のものを神さまだけがなさる。それは本当に信じてかかりなさい。どんなに損をしようが、どんなに人に誤解されようが、どんなに迫害されようが、また悪口を言われようが、



「神知りたもう」

という。もうそれでたくさんだ。実際、私は教育界にもう50年です。半世紀。その先を言うのはよそう。教育界には失望した。けれども、失望しながらも、なお望みを託します。

●無条件に我を受けよ

「⁵また我が名のために、斯の^{かく}ごとき一人の幼児を受くる者は、我を受くるなり」

「幼児はいい加減に取り扱うなよ。これを受くる者は私を受けただ」

と。こんなことを言えるのは神の子でなければ言えない。

「⁶然れど我を信ずる此の小さき者の一人を躓かする者は、寧ろ^{むし}大なる^{おおい}碾臼^{ひきうす}を頸^{くび}に懸^かけられ、海の^{ふかみ}深処^{ふかみ}に沈められんかた益なり」

凄いことを言うね、キリストは。そんな悪い野郎は海のどん底に沈めてしまおうぞと。

「⁷この世は^{つまずき}躓物^{つまずき}あるによりて^{わざわい}禍害^{わざわい}なるかな。躓物^{つまずき}は必ず^{きた}来らん、されど躓物を来らす人は禍害なるかな」

もう、キリストを裏切るユダのこともキリストには分かっているでしょう。

「⁸もし汝の手、または足、なんじを躓かせば、切りて棄てよ。不具^{かたわ}または

蹇跛^{あしなえ}にて生命に入るは、両手・両足ありて永遠の火に投げ入れらるるよりも

勝る^{まさ}なり。⁹もし汝の眼、なんじを躓かせば抜きて棄てよ。片眼にて生命に

入るは、両眼ありて火のゲヘナに投げ入れらるるよりも勝るなり。¹⁰汝ら慎

みて此の小さき者の一人をも^{あなご}侮^{あなご}るな。我なんじらに告ぐ、彼らの御使たちは

天にありて、天にいます我が父の御顔を常に見るなり」

こういうことをはつきり言える人はいない。本当に権威のある深い言葉です。

私たちに、実はえらいクリスマスがあつたんだよ。いつだったかな。私が御霊を受け
て伝道して、4、5年の頃だったね。ここに並みいる人たちの後ろに天使が二人ずつ立っ
てしまった。大変なクリスマスでした。私の回りに七人の天使が立ったという。その時には、
肺病が治つてしまふし、往きには杖をついてびっこを引いて来た人が、帰りには杖がいら
なくなつてしまつたり。まあ、天界の幻は見るやら、もの凄い音楽を聞くやら、大変なク
リスマスでした。もう前にも後にもない。ときたま、神さまはそんなことをなさる。
いいですか。「これでいい」なんていうところはないですから。無限無量の世界に入れられ、
与えられて、いよいよ人たちに分かち与えていくんです。

ルカ伝2章25節から、

「²⁵視よ、エルサレムにシメオンという人あり。この人は義かつ^{けいけん}敬虔^{けいけん}にしてイ

スラエルの慰められんことを待ち望む。聖霊その上に^{いま}在す。²⁶また聖霊に主

のキリストを見ぬうちは死を見ずと示されたりしが、²⁷此のとき、御霊に感

じて宮に入る。両親その子イエスを携え、この子のために律法の慣例^{しきたが}に遵^{したが}い



て行わんとて来りたれば、²⁸シメオン、イエスを取りいただき、神を讃めて言う、
²⁹『主よ、今こそ御言に循いて僕を安らかに逝かしめ給うなれ。』

もう、私はいいです、地上を去りますと。

³⁰わが目は、はや主の救を見たり。³¹是もろもろの民の備え給いし者、³²異邦人を照らす光、御民イスラエルの栄光なり』

という証言をしました。

『³³かく幼児に就きて語ることを、其の父母あやしみ居たれば、³⁴シメオン彼らを祝して母マリヤに言う『視よ、この幼児は、イスラエルの多くの人の或は倒れ、或は起たん為に、』

即ち、キリストを否む者は倒れます。キリストに従う者は本当に立ちます。

また言い逆を受くる徴のために置かる。³⁵——剣なんじの心をも刺し貫くべし——これは多くの人の心の念の顕れん為なり』

ということ、

『キリストが十字架にかかる、マリヤあなたの心臓も刺し貫かれる思いがするぞ』という預言です。生まれたキリストを見て、シメオンは十字架のキリストを預言しているんです。弟子たちも去ってしまった。キリストはただ独り十字架にかかった。

「けれども、お前たちを今に集めるぞ」

と、キリストは預言しておられる。その通り、キリストに躓いた弟子たちも聖霊を受けて立ち上がった。本当の弟子はたった4、5人しかない。これが新約聖書の基となり、全世界にキリストの福音が伝えられていく。世の末までも地の涯までも。何と言ったってこれはしょうがない。人間の力ではないですから。それだけのものを私たちに

「無条件に受けよ、我を受けよ」

と、キリストは言っているんです。キリストの他に何かあるかと思つたら大間違い。キリスト一点張りで行く。そこに無限無量なものがあるんですから。何を読もうが、何を見ようが、どういうことをしようが、全部その根源の力はキリストから来ますから。それを何か、神の子はこうである、ああである」

なんて、信仰箇条でもって規定するような、そんなものではありません。

● 童心即無心即無限無量心

私は、「クリスマスに何を語ろう」なんてひとつも思つてない。導かれてこういうことになつてしまった。童心即無心即無限無量心ということ。童心即無心即無限無量心はイエス・キリストが持つておられた。キリストは「父よ」と言つて、父に全托して生きておられた。そして、

「我を見し者は父を見しなり」



と。「私を見た者は神さまを見たのだ」と。

「善き先生」

と言われたら、

「なぜ、私のことを善いと言うか。神さまの他に善いものがあるか」

と言われた。そういう気魄が、そういう気合が本当につかめなければ、福音の世界に入れないんです。キリストの前に私たちは、

「参りました!」

と平伏す。そのようにして、あなた方の魂の中にキリストが本当に今日迎えられた。感謝いたします。終わります。

● 祈り

祈ります。1978年の降誕節、あなたの降誕の昔を今としてここにお迎えし、感謝いたします。今日は、東西南北からやむにやまれずして、いろいろな患難を乗り切ってやって来られた方々、また今、現に問題を持っていらつしやる方々もありますが、しかし、あなたに在っては、どのようなことも一切、それに勝ち得てあまりあることを信じ、パウロと共に聖名を讃え奉ります。

何がどうなつてもいいです。あなたが勝ちたまいい、あなたが我々の一人びとりの中で、本当に十字架道をもって担わしめてくださり、そしてまた、聖霊の光をもって暖めてくださり、また、人を本当に幸いならしめる本当の平安が私たちの中に臨んで、感謝いたします。平安のないところに平和はありません。

どうぞ、そのようにして、いつまでもいよいよもって、

「今日も明日も次の日も我は進み行くなり」

というイエス・キリストと共に、私たちはまた来年を迎えます。この降誕節がその意味において、私たち自身が本当に天界からこの地界へ降らしめられたように、私たちはまた天界へ昇るその時をまた楽しみにして、地上の生涯をつつ走って参ります。どうぞ、互いに助け、互いに祈り、そして、本当に苦しめる者、悩める者、悲しめる者、病める者に、この福音の歓喜を与えさせてください。本当に私たち自身が大歓喜の音信となつて進んで参ります。

今、この祈りを兄弟姉妹たちの全身に溢れるそれと共に、主イエス・キリストの聖名により捧げ奉る。アーメン!

